

ツイキャス読書会 課題図書 アンデルセン『はだかの王さま』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 14 回のツイキャス読書会の課題図書は、アンデルセンの『裸の王様』です。

テキストはこちらです。青空文庫 [『はだかの王さま』](#)

今回もたくさんの応募がありました。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます

朗読もしました。『はだかの王さま』朗読

はだかの王様（皇帝の新しい服） 読書感想文

何よりもおしゃれが大好きな王様が
国を強くしたいがために
優秀な側近だけを集めたかった。

戦争はきらいだったから
戦力よりも知性で
他国から攻められないようにしたかった。

アンデルセンがこの作品を書いたのは 32 歳のとき。デンマークはヨーロッパの大国の戦争に巻き込まれノルウェーから同盟を解消されたことなどから経済的にも落ち込んでいた時期なのだが芸術面では黄金時代と言われる。主に絵画と文学と科学の発展が充実していた時期だそう。

ヨーロッパ全体において
北欧の一国の位置付けは、
大国に占領されないように常に隣国と協調し、交渉し、そのための知恵なしには生きてゆけない国民性だったのではと想像する。

詐欺師の考えた「世界一の布」は、
バカな人間と自分にふさわしくない仕事をしている人間には見えないという
コンセプトによって、存在感を高める。

王様の側近は、自分がバカであり仕事に妥協していること認めたくない。

プライドが傷つくし、職務の否定になるからだ。

詐欺師は、側近たちの心理を悪用して、布のブランド価値が
自ずと高まるように、仕組んだのだ。

王様が途中で布の仕上がりを気にして
見に行かせた人間の職業は大臣と役人である。

その当時の痛烈な社会批判なのではないだろうか。
子ども向けの童話というより諷刺だと思う。

実際、当時の挿絵として残っている絵も
カリカチュアに似た手法で描かれている。

決して「ハウス世界名作劇場」みたいな
ぷっくりお腹のおデブな
かわいい王様ではないのだ。

パレードの途中
子どもの一言から国民全体へ広がった
本当は「世界一の布」なんてないんだとわかった事実。
それは自分に嘘をついていたということ。

なのにパレードは止めることができなかった。
アンデルセンは、その顛末を迷って書いたらどうか、やっぱり人間なんてついてしまった嘘は取り返しはつかな
いと悲観していたのだろうか。
32歳の青年が指摘した
人は自分に嘘をつきながら生きているという悲しい事実はいまも同じく繰り返されてる人の業なのか。

人の目を気にして
自分に嘘をつくことの羞恥をあらためて知る。

人に対しても
自分に対しても、
正直な気持ちを騙してはいけないのだ。

自分自身を振り返り
誠実に生きるということをもう一度大事に思う。
できているだろうか、、自分。

(おわり)

ショートコント [アホには見えない服]

布織り職人A(以下A)『今日は、ほんま暑いすな。(うちわ片手に、Tシャツにジーンズスタイル)』

布織り職人B(以下B)『おまえ、ほんまダサいかっこやな。(裸にネクタイでパンツ)』

A『お前こそ、ネクタイとパンツしか着てないやん』

B『僕の服が見えないの？これ若者の間で、今、流行ってるアホには見えない服なんや』

A(心の中：どう見てもはだかにしか見えへん。でも、かっこいいと言っておこう。俺アホじゃないし。)『その、服いいな』

B『君にわかる？この服の良さ』

A『よいっしょ。(AもTシャツを脱ぎだす)』

B『君。なんで、今、急に服を脱ぎ出したん』

A『や、脱いだらなんかモテるかな～と思って』

B『君。それただの裸やろ。ちゃんと服着なあかんよ』

A『そこで、この新作の服を王さまに着せると。まあ、こんな流れでいいやろ』

A・B『イ、イける』

つまり、この物語は布織り職人コントが核だと思いました。

一人だと、嘘がばれ、その者を牢へ入れよ。となるが普通だが、二人でボケ・ツッコミとなると、話を聞いている者は自分アホではないとばれたくないなので、巧妙に騙されてしまう。

嘘つき職人コンビは恐らく、他の国でもうまく成功させた実力派コンビだろうと推察される。

大人向けコントであるがゆえに、子どもにはまったく通用しないのである。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

「裸の王様」の感想文

初めの感想は

作者は「人は他人の意見に左右されずに自分で考えなければいけない。自分を守るためにうそをついてはいけない。身分にあぐらをかいてはいけない。」を伝えるために本を書いたと思います。

でした。

今までの私ならこれで終わりなのですが、時間があつたので、読書会で学んだ方法で「深読み」に挑んでみました。初めにウィキペディアで「アンデルセン」を引きました。作者の説明に「死ぬ以外に幸せになる術を持たない貧困層への嘆きとそれに無関心を装う社会への嘆きを訴えた」と書かれていました。さらに作者の生涯を読むと、貧しい靴屋で生まれ、運よく大学に行けたけれど、貧困生活が続いたことが分かりました。また、心配性で、生涯独身で、容姿を気にしていたことや孤独な人生を送っていたため人付き合いが苦手だったことも分かりました。次に、「デンマーク」を引いて、作者がこの話を書いた時は、ナポレオン戦争などの紛争が続いたころで、多くの人々が生活に困窮していたことや、デンマークがプロテスタントの国であることも分かりました。ついでに、アンデルセンの他の童話も少し読んでみました。

すると、「身分の高い女性が主人公の話は、途中で困難にあっても最後は幸せになる。子供や社会の片隅に生きる人物は神に見守られて亡くなる。裕福な男性の場合はひどい目に合う。」の傾向があるように思いました。これは、作者の女性に対するあこがれと劣等感、上位階級の人達(男性)への不満、キリスト教への厚い信仰を表していると思いました。

これらをまとめた結果、次の感想に変わりました。

アンデルセンは、話を書いた時、混乱した社会の現実に悲しみ腹を立てていた。

～多くの困っている人がいるのに上層階級の人間は救いの手を差し伸べてくれない。自分達だけがよければいいと思っている。これは、キリスト教の教えに反しているではないか。しかし、自分が声を上げる勇気はないし力もない。それなら本に書いて自分の思いを伝えようじゃないか。～ と。

ですから、文中の子供はアンデルセン本人であったのではないかと思います。

それから、今のデンマークは高福祉国家に変わっているので、もし生きていたらきっと喜んだでしょう。

(おわり)

『裸の王様』感想文

私は、王様ではないけれど以前は服を買うことが何よりも好きで、服を買うために働いていると言っても過言ではないくらい新しく自分がステキだと思う服を買って着ていました。

庶民の私でも沢山買っていたので王様なら毎日、毎日新しくステキな服を買っていたのだらうなあと思像して少し前の私ならすごく羨ましいと思ったと思います。

身だしなみを整える事や、オシャレをすることは良い事だと思うけれど、誰かに誉めてもらいたい、羨ましいと思われたいということばかりにとらわれていると何だかからっぽの人になる気がしてきて、もっと他に大事な事や、これから生きていくために必要な何かを手に入れるために私は服にこだわらなくなりました。

「去年の服を着るのは恥ずかしい！」と思っていた私ですが今では買ってから何年経ったか分からない服を気に入って着てたりします。

王様は、子供に裸であることを指摘され他の大人たちにも『王様は裸だよ』と言われて怒るのではなくみんなの言うことが正しいと素直に聞ける王様だから、オシャレも大事だけど、他のことにも目を向けてもともと悪い王様には思えないけど、国民の為に良い王様になってくれるのではないかと思います。

行進パレードを途中でやめるわけにもいかずに、裸だけど『今まで以上にもったいぶって歩きました。』と最後に書かれていて、少しかわいいと思いました。

(おわり)

『敏腕詐欺師』

この物語が伝えたいことは、「人は自分の不安や劣等感を隠そうとするものだ」ということだと私は思った。「自分もしかしたら他者より劣っているかも」というネガティブなオーラは、王様や大臣や、パレードの進行役や一般市民らを一瞬で嘘つきに変貌させてしまうほどののだ。

コンプレックスを隠そうとするのは他者も同じであるということ、みな意外と知らないのかも知れない。少なくとも、私は最近までそのことに気がつかなかった。普段はすっかり自分ひとりが悩んでいるつもりになってしまっている。

しかし、その人間の深い心の癖につけ込んだ2人の詐欺師はとても頭が良いと思う。とくべつな布を「自分にふさわしくない仕事をしている人と、バカな人には透明で見えない布」としたのは実に巧妙だ。誰にも少なからず心当たりがありそうな、「自分に嘘をついている人」と、「劣等感を持っている人」という設定。

そもそも「自分にとってふさわしい仕事」とか、「何をもってバカとするか」は、客観的基準がないから、自分の主観に裁量が任されることになる。あえて客観的基準がないものに照準を定め、巻き込みの連鎖を促す手法はかなりの敏腕だ。

さらに2人の詐欺師は布を織る演技をする。本当は布はないのにあたかも布があるかのようなフィクションが、人々の「不安」というフィルターを通して、実際に布があるように仕立て上げられる過程があぶり出される。いったい何が嘘で何が現実なのか。客観的事実が人の解釈で化学変化を起こし、全く別の定義付けがなされてしまう恐ろしさ。

果たして2人の詐欺師の原動力は、たんにお金を儲けたいという事なのだろうかと疑問さえ湧いてくる。彼らは、国家的煽動者、あるいはスパイか。

最後は子どものひと声で、まるで風船を針でパチンと割ったかのように、皆がハッと我に返る。聴衆の前に丸裸である王様は、気づいたその瞬間から「新しい服」で気持ちをあらたに執務に取り掛かれるだろう。

私も、時々不思議な布を羽織り、鏡の前に立ってみる必要があるようだ。「これでいいのか?」「自分に嘘をついてないか?」

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『はだかの王様』

原罪の中に生きる人間は神が失われている故、人との比較で自らを規定しようとする。

そこで用いられる評価は自ずと、人の間で支えられるしかなく、人の思いの中で揺れ動く他はない。

「愚か」や「ふさわしい」とは本来、「神に背くこと」、「神からそれが与えられていること」の意である。物語の登場人物はすべて原罪のなかで生きている。

人はそのゆがんだ基準により頼んでいきるゆえ、その基準から自分が外れそうだと判断すると、真実から目を背ける。それが「うそ」である。ゆがんだ基準の中で人が、己はそれによって守られると考えるのである。

詐欺師はそのおろかさにつけこんだ。この者は、人の世の中で裁かれなければ安全であると考えている。これも人の基準により頼み、真実から目を背ける嘘つき、つまり「ばか」である。

王様はそうしたゆがんだ基準の中で自分が優れていると信じている。

その仕事にふさわしいかどうか人も人の中で人の思いで決められていくものである故、登場人物はことごとく、人の目を気にして真実から目を背けていく。

「ばか」や「ふさわしくない者」は、人の間でその様でなくするために、そうあり続けるよう努力する。

最終的に詐欺師からだまされた人間たちは自分たちがだまされたと気付くのだが、それもまた人の思いが基準によるという仕方なさである。さらに王様は、そこでそのことに同意してしまうと己の恥が確定してしまうのでそれを避けるために、詐欺師のいうことが正しかったかのように振る舞い続ける。その努力がむなしいという真実から目を背けて人の世に寄り頼もうとしたのだ。その行動が人の世の間でも矛盾が指摘されるものであるにもかかわらずに。これはもうだめ押しの愚かさである。

この物語は、原罪を負った人間社会を切り取って描いている。人間の悲惨さが描かれている。

このような死ぬべき私たちの罪を贖ってくださるために私たちの十字架にかかってくださった私たちの救い主イエスに永遠の栄光あれ。

(おわり)

『はだかの王さま』 2017 in America

とある国のあるタワービルに大統領が住んでいました。大統領は手にしたばかりの権力が大好きで、大統領令をたくさん発令していました。大統領の望むことと云ったら、お金ではありません。だって、すでに巨万の富を築いていましたから。だから、お金で買えるものには興味がありません。お金で買えない「人心」を操る権力が欲しかったのです。権力は、お金では動かないものをどんどん動かしてしまいます。

ふつう、大統領はどこにいるのですかと聞くと「ホワイトハウスにいらっしゃいます。」と言うものですが、この大統領は違います。「タワービルにいらっしゃいます。」というのです。

タワービルの周りには、活気に満ちたアップタウンが広がっていました。世界中のあちこちから知らない人が毎日、おおぜいやってきます。

大統領は、国益が一番で、国民の為にはいい大統領のようにみえました。しかし、この国は国益を一番に追うには大きくなりすぎていたのです。大統領は実業家出身で仕事は早いのですが、なにせ政治経験がありませんでした。なので、一番従順で、一番害のない国の首脳を選んで、外交の練習をしようと思いました。選ばれた首脳もこの国との蜜月を世界に見せるいい機会です。お互いに腹に一物を抱えながらの会談は大成功でした。大統領は、従順な国の首脳から、これから相まみえる各国の首脳の情報を手に入れて「本番」に備えるのでした。

大統領は、国益のことも考えますが、自分と自分の家族のことはもっと考えます。中東の国々を入国禁止にしましたが、自分の資産がある国はちゃっかり外します。自分がドイツ系なので、選挙でもドイツをやり玉にあげませんでした。愛しい娘の婿は敬虔なユダヤ教徒で、聖地への大使館の移動も考えています。ユダヤ人がこの国のフィクサーであることは、大統領にはよくわかっているのです。

そうそう、「はだかの王さまだ！」と叫ぶ子供が出てこないって？表現の自由がウリの国でしたが、自分の意見を言う側近をどんどんクビにするので、ほんとのことを言ってくれる人はいません。細々と移民の人々や芸能人が反対を唱えるだけです。ほんとのことを叫んでくれる子供が出てくるかどうかは、これから見守っていくしかありません。この大統領の物語は始まったばかりなのですから・・・。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『はだかの王さま』 感想文

誰が言ったのかははっきり覚えていないが以前に、「裸の王様の話は王様だけを馬鹿にした話じゃなくて、子どもでも言えるようなことを言えない大人たちも馬鹿にしている話だ」という話を聞き、なるほどなと思っていた。

今回、実際に読んでみて確かにそのとおり、周囲の大人たちも滑稽に描いてることに気が付いたが、他にも気になる点があった。

この物語は、「価値がある」と思い込んでいたものが幻想に過ぎなかったことを思い知らされる話だが、この物語とは反対に『星の王子様』は「思いがけない価値」を発見する物語である。王様が信じていた価値は幻想だったが、王子様は最後に“幻想の”価値を手に入れたのだろうか？私は幻想ではないと思う。

気になったので、もっと突き詰めて考えてみたところ、王様は服に“普遍的な”価値があるという幻想を持っていたのに対して、王子様は故郷のバラに“自分独自の”価値を見出したという違いがあるという結論に達した。

考えてみると、幻想の普遍的な価値はそこら中に存在する。お宝鑑定団に提示されるような品物、ゲームのガチャで手に入るレアアイテム、などなど。自分自身がこうした価値の虜になっている間は気が付かないが、周囲から見ると滑稽に見えてしまうのだろう。

一方、個人的な価値に執着している人は、幻想の価値に執着している人ほど滑稽には見えない。「思い出の品だから手放せない」と言われれば無価値とは途端に呼べなくなる。近藤麻理恵さんの片づけ本でも思い出の品を手放すことについてはあまり強く書かれていない。

もしも王様が、みすばらしい服を好んで着ていたとしてもそれが“自分独自の”価値に基づく理由だった場合はそれほど滑稽に見えなかったように思う。

原題が王様ではなく皇帝だったことを考えると、普遍的な価値を追求しやすい傾向にある人だったのかなと疑ってしまう。

(おわり)

はだかの王さまの感想文

アンデルセンの「はだかの王さま」を子どものとき以来再読した。シンプルな童話だが、大人になった今だからこそ身につまされる話だと思った。身近な例を挙げて感想文を書いてみる。

まず思い当たったのが芸術作品。私はときどき有名な画家の期間限定の展覧会に足を運ぶことがある。実際にはその本当の価値を分かりもしないのに鑑賞することで何となく満足する。例えばピカソは天才とされ、その作品はオークションで高値で売買される。買い取った資産家はおそらく自分が「その作品がその買い値に値する」と考えたのではなく、「世間がそれだけの価値があると認めた」と判断したために購入したのだろう。私も作品を見回り、疲れた時に「こんなものをお金を払って有難がってみてる自分」を馬鹿らしく思ったりすることもある。その感覚は意外に重要だ。

次に株価。あまり詳しいわけではないが、企業の実体的な価値と離れて、話題となったために株価が急騰することがある。「買いが買いを呼ぶ」というのだろう、人は他人が欲しいと思うものを欲しいと思うのだ。逆に株価が暴落するのは共同的な幻想が破綻したときに皆が一斉に売りに動くためだろう。

最後に、最近私が著書も拝読し注目していた某政治学者について宮澤さんが批判されていた。私は政治や時事などの討論番組を見るのが好きで、話しぶりなどから流暢に語る人の意見について賛同し、取り入れて自分の意見のように語ってしまうこともある。私自身は評論家の意見をそのまま鵜呑みにしているのであって、事実と評論家の解釈を分けて考えているわけではないことに思い至った。例えば私は TPP そのものの内容については何一つ知らないと言っている。賛成、反対の指標になるのは主に批評家のコメントであり、それは他者の目を通して、物事を見、考えている。「はだかの王さま」の登場人物たちが他人の眼を信じ、自分の眼を信じられないこととそれほど大きな違いはないと感じた。

(おわり)

『パックス・ロマーナ』

『これ、今朝入荷したばかりのです。やばいっす。イメージは『裸の王様』。ネイティブは、インペラトウウルって発音します。王様っていうと、半ズボンにタイツで、マントのおフランス的なあれですよ。そうそう、テグジュペリ的な。星の王子さま的な。でも、日本人で王さまとかいうと、ディープ・パープル日本語で歌っつけみたいな。え、知らないっすか？ じゃあ、キャンセルをお願いします。今シーズンの流行りは、ローマ皇帝のイメージですね。くうう、インペラトウウル、カエサルのは塩野七生のもの、川平のものは慈英のもの、むむむ、古代ローマだぞ、これは何だ、やんちゃだぞ、セクシーだぞ、でも、世界皇帝だぞ、ってことですね。インペラトウウル、実はこれ、ネロをイメージしてるんですよ。え？ ああ、眠いよ、パトラッシュじゃないほうですよ。とりあえず、1回黙ってもらっていいですか？ あ、冗談です。もちろん、暴君のネロの方ですよ。五代目皇帝のネロ。おまえら調子のとってると、徹底的にやっちゃうぞ、みたいな。キリスト教徒なんかライオンとタイマンさせちゃうぞ、みたいな暴君。とりあえず、ふつうは、布巻けばいいんですけどね、日本人がやると、え？ テルマエ・ロマエ？ 阿部寛？ サウナで温泉卵でも食っつけ～ってみたいになるから、なくてもOKです。試着しますか。じゃあ、こちらへ。どうですか？ いや～ぜんぜんお似合いですよ。え？ ぜんぜん攻め過ぎじゃないですよ！ いやいや、ストリートで自意識過剰だと、マジ、クソダサいです。このくらい無防備なほうがバランスいいです。逆に、透けすぎじゃない？ ってことですよ。安心してください、穿いてますよ、みたいな感じで、ここにロゴあるの見えます？ パックス・ロマーナって。もう一度いいますね。ここにロゴ、いや、金正恩マンセー、じゃなくて、ピースって意味です。世界平和。一点ものなのにジャストサイズとかありえないし。じゃあ、このままパレードの方へお願いします！

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>